

大学生のサークル集団に関する研究動向

—新井・松井（2003）からの研究動向の変化—

筑波大学大学院人間総合科学研究科 高田 治樹

筑波大学人間系 松井 豊

Research trends concerning university clubs: Shifts in research directions since Arai and Matsui (2003)

Haruki Takada (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Yutaka Matsui (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This paper examines the state of research relating to university clubs since 2003 through comparisons with Arai and Matsui's (2003) review. Firstly, since 2003, it has been shown that connections with university clubs and other members are important in the student lives of members. Secondly, research has investigated a number of aspects of university clubs, such as group formality and their organizational properties, captaincy and sub-leaders in terms of leadership qualities, and interpersonal behaviors and thoughtless behaviors as new fields. Thirdly, other research has focused on the motivation to participate in clubs, achievement motivation, and levels of satisfaction and commitment. Finally, based on a review of the recent research, this paper highlights the need for further research on the reciprocal nature of interpersonal relations within clubs, club activities, their systems, and university clubs themselves, as well as the characteristic attitudes towards university clubs.

Key words: group, university clubs, sports clubs

本論文は、2003年以降に実施された大学生サークル集団に関する研究の動向についてまとめることを目的とする。2003年までの大学生サークル集団の研究について、新井・松井（2003）がレビューしている。しかし同レビューより数年経過し、サークル集団研究の動向も変遷している。そこで本論文では、新井・松井（2003）のサークル集団の研究知見を略述した後、それ以降のサークル集団研究の動向を紹介し、2003年前後のサークル集団研究の相違を論じる。

具体的には、新井・松井（2003）を紹介した後、新井・松井（2003）の枠組みに沿って2003年以降のサークル集団を対象とした心理学的研究について

まとめる。その中でも本論文では、サークル集団研究の心理学的意義、サークル集団の性質に関する研究、リーダーシップ研究、対人関係に関する研究、迷惑行為に関する研究、サークル集団への所属を規定する要因に関する研究をまとめる。最後に紹介した研究知見をまとめ、今後の展開について考察する。

なお本論文では、新井・松井（2003）にならない、クラブ・サークル・同好会などの集団の呼称を、集団の種類を区分せずに“サークル集団”と呼称するが、先行研究において呼称を意図的に使い分けている場合には、各研究に従って記述する。

新井・松井（2003）による教育学的・体育学的研究動向のまとめ

新井・松井（2003）は、サークル集団の研究を実態調査と教育学的・体育学的研究、心理学的研究ごとに、まとめている。

教育学的・体育学的研究においては、サークル集団へ所属することは、集団本来の活動だけではなく人間関係を求めていると同時に、サークルに所属する大学生はサークル内の人間関係に対して問題を感じていることが明らかにされていた。またサークル集団に所属することで、学生が技術面だけでなく人間的にも成長することを、サークル参加者だけではなく、大学やOBなど外部の人々からも期待されているとまとめている。

サークル集団所属の心理学的意義

新井・松井（2003）は、サークル集団に関する心理学的研究をまとめ、“大学生がサークル集団に所属することは、対人関係能力や社会性の獲得にとって重要であるだけでなく、大学生の日常生活において心理的支えとなる安定化の機能をも果たしている”と述べ、サークル集団に所属する重要性を強調している。

新井・松井（2003）以降のサークル集団の心理学的意義に関する研究においては、サークル集団と学生との関わりに焦点を当てて検討がされている。

樋口（2007）は、大学生の適応に関して調査をし、サークル集団の活動に満足している学生が、大学生生活に適応しやすく、生きがいを強く感じていることを明らかにした。

高木（2006, 2007）は、大学生にとって重要な組織への帰属意識が大学生活への充実感へ与える影響について検討している。その結果、部活やサークルに所属する学生のうち、集団の価値や目標を内在化している学生は、自己の存在を肯定しやすいことが明らかとなった。以上の結果から、高木（2007）は部活やサークルが、所属して注力することで初めて充実感が得られる組織であると指摘している。

新井・松井（2003）では、学生にとってサークル集団への所属が、多くの有益な側面を持つことを指摘していた。しかし、2003年以降の研究においては、サークルに不満を抱かず、サークル集団へ積極的に関わることによって、大学生生活の満足感や自己への評価が向上していた。したがって、学生の大学生活にとって重要なことは、サークル集団に所属するだけではなく、サークル集団との関係を良好にし、サー

クル集団へ積極的に関わろうとすることであると考えられる。しかしサークル集団研究において、サークル集団と所属成員との関わりに関する研究が少ないことが指摘されている（橋本・唐沢・磯崎, 2010など）。

サークル集団の性質に関する研究

新井・松井（2003）は、サークル集団に特徴的な性質である年功序列規範に関する研究（結城・山口, 1995, 1996など）を紹介し、年功序列規範と集団への評価との関連性が検討されているとまとめている。2003年以降では、サークル集団の性質として、年功序列規範をはじめとするサークル集団の集団規範に加えて、集団フォーマル性や組織風土を扱っている。

新井・松井（2003）以降に実施されたサークル集団の規範研究としては、遠藤・下川・安田・布施・袴田・伊藤（2009）が挙げられる。遠藤他（2009）は、大学における運動部活動に所属している選手を対象として、運動部活動の集団規範と業績との関連性を検討した。調査の結果、業績の高い集団ほど、集団規範が強いことが明らかにされた。また同調査では、90年代と現代の集団規範を比較しており、その結果、現代の選手は、“態度規範”“上下序列規範”“奉仕規範”という規範を強く感じていた。この結果から遠藤他（2009）は、現代の運動部所属選手は、規範への耐性が低下している可能性を指摘している。

年功序列規範と関連する概念としては、集団フォーマル性について研究がされている。集団フォーマル性は、“集団がフォーマル集団に当てはまる程度”（新井, 2004）を表しており、2003年以降では集団フォーマル性が集団成員に与える影響について研究されている（新井, 2004; 福崎・岩淵, 2008; 橋本他, 2010）。集団フォーマル性に関する研究をまとめると、集団フォーマル性が高い集団ほど、サークル集団内において“衝突回避”“服従”“礼儀”“参照”という対先輩行動を促進し（新井, 2004）、集団成員の達成動機やセルフモニタリング能力を高め（福崎・岩淵, 2008）、サークル集団への規範的コミットメントや集団同一視コミットメントが強められていた（橋本他, 2010）。

次にサークル集団の性質として、組織風土が研究されている。

小室・荒井・竹中（2008）は、“クラブ中心の統制”“自由なコミュニケーション”“イノベーションの受け入れ”より構成される組織風土尺度（樋口, 1996）を用いて、大学生スポーツ集団に所属するアスリー

トのメンタルヘルスと大学生スポーツ集団の組織風土との関連性を検討した。その結果、“自由なコミュニケーション”と“イノベーションの受け入れ”という組織風土と、“心身のコンディショニング”や“チームへの適応”“挑戦的態度”などのメンタルヘルスとの間に有意な正の相関が見られた。一方、“クラブ中心の統制”という組織風土では、学生は日常生活での疲労やストレスを感じていた。

他方、尾関・吉田（2007）は、“自由なコミュニケーション”と“イノベーションの受け入れ”は、自分の意見を表明しやすい程度であるという点で類似した概念であると指摘し、組織風土を再検討している。その結果、サークル集団における組織風土として、集団が管理されている程度を表す“管理性”と、自分の意見を明らかにしやすく、集団で公平に扱われている程度を表す“開放性”の2因子を抽出している。さらに尾関・吉田（2007）は、組織風土が迷惑行為に及ぼす影響を検討した。その結果、集団レベルでは“管理性”が“集団活動に影響を及ぼす迷惑行為”を抑制し、“開放性”が“集団内の人間関係に影響を及ぼす迷惑行為”を抑制していた。一方、個人レベルでは“開放性”が“集団活動に影響を及ぼす迷惑行為”と“集団内の人間関係に影響を及ぼす迷惑行為”の両方を抑制していた。

尾関・飯田・鈴木・中野（2009）は、サークル集団の組織風土とサークル集団への過剰適応傾向との関連について検討した結果、管理性が低く開放性が高い集団の成員は、管理性と開放性の両方が高い集団の成員と管理性が高く開放性が低い集団の成員よりも、他者に対して配慮をする傾向が強かった。

以上をまとめると、新井・松井（2003）以降では、サークル集団の性質として、年功序列規範に加えて、集団フォーマル性や組織風土が取り上げられていた。集団フォーマル性はサークル集団に独特の変数であり、2003年以降に新たに見出された。自分の意見や考えを表明しやすいサークル集団では、学生はチームに適応しやすく、活動や人間関係に影響を及ぼす迷惑行為を行わない。一方で、組織として管理され規範が強いサークル集団では、学生は先輩の行動を参照し、サークル集団の規則や先輩に従い、日常生活にストレスを感じていた。

サークル集団のリーダーシップ

新井・松井（2003）では、大学生のサークル集団や部活動のリーダーを対象としたリーダーシップ研究（蜂谷、1999など）についてまとめられている。これらの研究の多くは、リーダーシップの課題志向

的機能と集団維持的機能の2つについて扱っていた。

新井・松井（2003）以降のリーダーシップに関する研究は、リーダーシップの研究（高口・坂田・藤本、2007）だけではなく、キャプテンシーやサブリーダーの補佐行動に関する研究も行われている（村井・猪俣、2010；鈴木、2009）。

高口他（2007）は、学生サークルに所属する大学生を対象として、リーダーのリーダーシップとプロトタイプ性が集団活動に従事する成員に及ぼす影響を検討した。調査の結果、リーダーシップの機能として、“圧力P機能”“計画P機能”“M機能”の3因子を抽出している。外集団への意識が高い成員は、リーダーシップの“M機能”が高まると、ミーティングに参加しやすい雰囲気であると評価し、リーダーシップがプロトタイプ性に当てはまるほど、集団活動に対する動機づけが高められていた。一方、外集団への意識が低い成員は、“M機能”が高まることで、ミーティングに参加しやすい雰囲気であると評価し、“M機能”と“圧力P機能”によって集団活動に対する動機づけが高められていた。

村井・猪俣（2010）は、スポーツ集団の運営のために、コーチや監督など選手外のリーダーではなく、選手から選出されるチームリーダーであるキャプテンの影響を吟味する必要があると指摘し、勝利追求型のスポーツチームにおけるキャプテンの資質などを表す“キャプテンシー”について検討している。調査対象者は、試合中に選手の相互作用が必要と考えられるクラブ、実業団、大学のチームに所属する選手であった。調査の結果、キャプテンシーとして“目標志向性”“人間関係の維持発展”“メンバーへの激励”“競技知識”“競技能力”の5因子が抽出された。それぞれのキャプテンシーの特徴を見ると、成績上位の群では、すべての側面の得点が有意に高かった。性別にみると、男性メンバーは“目標志向性”“競技知識”“競技能力”が高いキャプテンを求めている、女性メンバーは“人間関係維持能力”“メンバーへの激励”が高いキャプテンを求めている。

鈴木（2009）は、集団におけるサブリーダーに注目した研究が少ないことを指摘し、サブリーダー独自の補佐行動を検討している。その結果、サブリーダーの補佐行動として“リーダーへのメンタルフォロー”“準備・雑用”“制止”の3因子を抽出した。副キャプテンの補佐行動は、キャプテンのリーダーシップ行動を媒介し、所属成員の部活動への適応感を促進していた。

以上のように、近年ではサークル集団におけるリーダーシップ研究の領域において、リーダーシッ

ブだけではなく、リーダーが持つキャプテンシーやサブリーダーの補佐行動について検討がされている。つまり2003年以降では、リーダーシップ研究の対象が広がり、リーダー以外の幹部に焦点が当てられていた。集団の雰囲気をよくしようとするリーダーである場合、集団に対抗する集団の有無に関わらず、学生は集団のミーティングに参加しようとしていた。サークル集団の男性メンバーは競技に関する知識や能力があるキャプテンを求め、女性メンバーは、人間関係を取り持ち、メンバーを激励するキャプテンを求めている。またサブリーダーがリーダーの行動を補佐することで、所属成員は集団内の仲間関係に満足し、活動に積極的に取り組むことが明らかとなった。

サークル集団での対人関係

新井・松井(2003)は、サークル集団内の個人対個人の対人関係を扱った研究(酒井・安藤, 1998など)をレビューして、サークル集団における対人関係の研究は先輩後輩関係の現状把握に留まっていると指摘している。2003年以降、新井はサークル集団内での対人行動に関して、対先輩行動と対後輩行動に分類して一連の研究している(新井, 2004; 新井・松井, 2004, 2006)。

新井・松井(2004)は、“よく知っている後輩”を想起させ、サークル集団における対後輩行動について検討した。その結果、対後輩行動の13の行動側面(命令・注意、計画、配慮、指導、親交、攻撃・無視、同調・抑制、権力行使、回避、模範、上下回避、受容)を抽出している。また、これら13の行動側面がさらに7つの行動群(支配、支援、親和、攻撃、拒否、非支配、受容)に円環状に布置され、“支配—非支配”と“親和—拒否”の2軸により構成されると理論化した。

一方、新井(2004)は、対象となる先輩を特定せずに、サークル集団に所属する大学生を対象として、対先輩行動を検討している。その結果、“親交”“衝突回避”“服従”“礼儀”“参照”“攻撃”の6因子を抽出した。新井(2004)は、先輩に対して感じる社会的勢力と、集団フォーマル性と集団凝集性といった集団状況要因が対先輩行動に与える影響を検討している。その結果、社会的勢力の罰勢力が強い場合に、“衝突回避”や“服従”が促進され、肯定的勢力が強い場合に、“服従”“礼儀”“参照”“親交”が促進されていた。また集団状況要因の影響を見ると、集団フォーマル性が高くなると、“衝突回避”“服従”“礼儀”“参照”が促進され、集団凝集性が高くなると、

“礼儀”“親交”が生じやすく、“衝突回避”は生じにくくなっていた。新井(2004)は、以上の結果をまとめ、対先輩行動は水平的関係行動である“親交”と、集団フォーマル性によって生じる上下関係の行動である“礼儀”“服従”“衝突回避”と、先輩からの肯定的勢力によって引き起こされる自発的な上下関係行動である“参照”の3種に分けられると、新井(2004)は考察している。

新井・松井(2006)は、“所属する集団の中で親しい先輩”と“所属する集団の中であまり親しくない先輩”を対象として特定し、対先輩行動が円環的な構造となるかについて検討した。その結果、対先輩行動は“服従—不服従”と“親和—回避”の2軸により構成され、円環状に布置されることが明らかとなった。また対先輩行動と、対象となる先輩の社会的勢力と集団状況要因との関連を検討し、社会的勢力において、対象となる先輩の肯定的勢力と“親交”“参照”との間に、正当勢力と“服従”“礼儀”との間に、罰勢力と“衝突回避”との間に、それぞれ正の相関関係を見出している。さらに集団フォーマル性が高い集団においては、服従行動が多くなっていた。

新井は、一連の研究においてサークル集団内の先輩後輩関係について、対先輩行動と対後輩行動の2種に分類して検討し、対先輩行動の6側面と、対後輩行動の13の行動側面を見出した。対先輩行動は、集団フォーマル性によって生じる上下関係の行動と、社会的勢力によって生じる自発的な上下関係の行動と、水平関係の行動の3種に分けられると理論化した。サークル集団のフォーマル性が強くなるほど、先輩に服従しやすい傾向が見られた。先輩に親密さを感じている場合には先輩との親交を深めようとし、先輩の行動を正当であると判断する場合には、先輩に従いやすかった。また先輩から望ましくない行動を受けると、先輩との関わりを拒否しようとしていた。一方、対後輩行動は“支配—非支配”と“親和—拒否”による2軸により構成され、対先輩行動は“服従—不服従”と“親和—回避”による2軸で構成されており、対先輩行動と対後輩行動には対応関係が見られた。

サークル集団での迷惑行為

サークル集団における対人行動の分類の他に、サークル集団内の行動に関して、新井・松井(2003)以降に新たに行われた研究として、尾関ら(尾関・吉田, 2005, 2007, 2009)のサークル集団内での迷惑行為に関する一連の研究が挙げられる。

尾関・吉田(2005)は、サークル集団の集団サイズと上下関係規範が迷惑行為の認知に及ぼす影響について検討した。その結果、上下関係が明確な集団では、同級生や後輩よりも先輩が迷惑行為を行う場合に、迷惑であると認知される程度が弱かった。また上下関係が明確な場合、小集団の成員よりも中集団の成員の方がより強く迷惑行為を迷惑であると認知していた。一方で、上下関係が不明確な集団では、小集団の成員が最も強く迷惑行為を迷惑であると認知していた。これらの結果について、尾関・吉田(2005)は、上下関係が明確な集団は系統立ち、一人の迷惑行為が集団での活動の妨げになるため、集団サイズが大きくなることで迷惑の認知度が上がったと考察している。一方、上下関係が不明確な集団では個人単位のつながりを重視しているため、小集団での迷惑の認知度が上がったと考察している。

尾関・吉田(2007)は、サークル集団における組織風土と集団アイデンティティがサークル集団内における迷惑行為の生起及び認知に与える影響について検討した。その結果、サークル集団における迷惑行為において“集団活動に影響を及ぼす迷惑行為”と“集団内の人間関係に影響を及ぼす迷惑行為”の2因子を抽出した。尾関・吉田(2007)では、集団レベルと個人レベルで組織風土による迷惑行為の生起について検討しており、集団レベルでは、“開放性”が“集団内の人間関係に影響を及ぼす迷惑行為”を抑制し、“管理性”が“集団活動に影響を及ぼす迷惑行為”を抑制していた。一方で、個人レベルでは“開放性”のみが“集団活動に影響を及ぼす迷惑行為”と“集団内の人間関係に影響を及ぼす迷惑行為”を抑制していた。

尾関・吉田(2009)は、“成員性”と“誇り”によって構成される集団アイデンティティが、集団内における迷惑行為の認知に及ぼす効果を検討した。その結果、所属集団における成員性が強い成員ほど、“集団活動に影響を及ぼす迷惑行為”を高く認知していた。また“集団内の人間関係に影響を及ぼす迷惑行為”については、所属成員の集団成員性が低い集団では、誇りの高い成員がより迷惑行為を認知していた。

このように、尾関らによるサークル集団内の迷惑行為に関する一連の研究は、集団内でのルールや規範からの逸脱行為という反組織的行動に関する研究であり、サークル集団における活動の阻害や人間関係の悪化など、サークル集団へのマイナスの影響を与える要因の検討を行った研究として位置づけられる。サークル集団が管理されることで、集団活動を阻害する迷惑行為が抑制され、サークル集団が開放

的であると、集団内の人間関係に悪影響を与える迷惑行為が抑制されることが明らかとなった。また上下関係が明確で集団サイズが大きい集団と、上下関係が不明確で集団サイズが小さい集団において迷惑行為が強く認知されていた。このように、迷惑行為は集団の性質によって抑制されることが明らかとなっている。一方で、集団アイデンティティが高い成員は迷惑行為を強く認知する傾向があることが明らかとされ、集団の性質ではなく、個人の性質に焦点を当てて研究も展開されている。

サークル集団への所属を規定する要因

新井・松井(2003)は、サークル集団に所属する成員の半数が、サークル集団を一度は辞めようと思ったことがあるとする実態調査(渡邊・高橋, 2002)を紹介していた。2003年以降においても、サークル集団への所属に関する調査がなされており、池田・畑(2003)は、運動部に所属する73%の学生が、途中で辞めたいと思った経験があることを明らかにした。安田・遠藤・下川・布施・袴田・伊藤(2009)は運動部活動に関する実態調査を行っており、同調査には、退部意識に関する質問項目が含まれていた。回答の割合は、退部意識が“少しあった”と回答した学生は34%おり、“よくあった”と回答した学生は20%いた。

このように大学生の5割以上がサークル集団を辞めようとした経験があることが明らかとなっている。そのような現状を反映して、成員を所属させる要因が検討されている。新井・松井(2003)では、サークル集団への所属を規定する要因について、参加動機の種類・検討、満足感や、帰属意識、達成動機についてまとめている。本論文ではそれぞれの要因について、新井・松井(2003)以前と以降の研究についてまとめる。

サークル集団への参加動機 新井・松井(2003)は、サークル集団への参加動機(山本, 1990など)に関する研究をまとめ、運動部に参加する学生の参加動機として“回避”“達成”“健康・体力”“親和”“自由・平等性”“固執”“社会的有用性”“期待”が見出されるとまとめている。

2003年以降のサークル集団の参加動機に関する調査としては、蔵本・菊池(2006)や平野・柳(2007)が挙げられる。

蔵本・菊池(2006)は、体育会系運動部とスポーツサークル活動に参加する学生を対象に参加動機を検討している。その結果、山本(1990)と同様に、参加動機として、“親和”“自由”“健康・体力”“達成”

“回避”“固執”“社会的有用性”の7因子を抽出した。また運動部に所属する学生とサークルに所属する学生との参加動機を比較した結果、運動部に所属する学生は“達成”“社会的有用性”という参加動機をより強くもっていた。一方、サークルに所属する学生は、“親和”“自由”“健康・体力”という参加動機を強く持っていた。

平野・柳(2007)は、ウィンドサーフィン活動を行っている学生を対象として、参加動機と活動継続動機について調査している。その結果、参加動機として、“流行”“効果”“余暇”“活動・競争”“挑戦”などの8因子を抽出した。また活動継続動機において、“先輩や仲間から恵まれた”“目標や目指すものがあった”“競技能力に恵まれた”という動機が多く見られた。

サークル集団への参加動機に関する研究は、2003年以降においても、2003年以前とほぼ同様の構造が見出されていた。2003年以降では、サークルと部活での参加動機が比較されており、大学生はサークルに対して成員との繋がりと自由な雰囲気を求めており、部活に対して活動での達成感や社会的利益を求めていた。

サークル集団における達成動機 新井・松井(2003)は、達成動機に関する研究として樋口(1996)を紹介している。樋口(1996)は、サークル集団における達成動機を検討し、“自己向上”“活動”“イニシアティブ”の3因子を抽出した。また達成動機と組織風土、チームメイトへの満足度、リーダーシップとの関連性を検討していた。その結果、サークル集団がイノベーションを受け入れる組織風土であると、メンバーの自己向上に対する動機が強かった。またチームメイトに対する満足度が高いと、メンバーの活動に対する動機は強く、イニシアティブに対する動機は弱かった。リーダーシップの機能と達成動機との関連性が低いことも明らかにされた。

2003年以降において、福岡・岩淵(2008)は、集団フォーマル性が達成動機と対人関係処理能力に与える影響について検討した。達成動機の分析の結果、“活動”“イニシアティブ”“人脈形成”の3因子を抽出した。集団フォーマル性と達成動機の関係について、サークル集団の集団フォーマル性が高くなると、メンバーの“活動”や“イニシアティブ”への動機づけが強められた。

達成動機に関連して、田中・井内・久保田・上田(2007)は、ソフトボール部員を対象として、練習に対する動機づけによる心理的要求の充足や原因帰属との関連について検討している。その結果、練習に対する動機づけが強い選手は、主体的に行動しよ

うとしたり、他者と親密になろうとする心理的要求が強かった。また動機づけが強い選手は、結果を努力に原因帰属をし、コーチに受容されていると感じており、困難に直面した場合にはそれを乗り越える努力をしようとする事が明らかとなった。

達成動機に関する研究をまとめると、サークル集団における達成動機は、一貫して組織風土や集団フォーマル性という集団の性質との関連性について検討されており、サークル集団のフォーマル性が高いほど、活動に積極的に参加し、率先した行動を行う傾向が見られた。一方、2003年以降では、動機の対象を練習に限定した研究もされており、練習への動機づけの高い学生は、主体的に行動し、困難を乗り越えようと努力するなどの活動に積極的に関与し、他の集団成員やコーチとの人間関係が良好であった。

サークル集団への満足感 新井・松井(2003)はサークル集団への満足感の研究として、飛田(1994)による研究を紹介している。飛田(1994)は、所属サークルへの自分の貢献度の評価と集団活動の満足度との関係を検討している。その結果、自己の貢献度が相対的に低い学生では、集団の課題志向性が高いほど満足度が高く、自己の貢献度が高い学生では、集団の成員志向性が高いほど満足度が高いことを明らかにした。

2003年以降においても、サークル集団への満足感について研究されている(阿保, 2009, 2010; 入江・高橋, 2008)。

入江・高橋(2008)は、Herzbergの二要因理論に基づいて、サークルへの満足度尺度の作成を試みている。その結果、満足度を“活動満足度”“人間関係満足度”“練習満足度”の3側面に分類している。これらの満足度間の関連性を検討した結果、“人間関係満足度”は“活動満足度”と“練習満足度”を高め、“活動満足度”と“練習満足度”がサークル集団全体の満足度を高めていた。

阿保(2009, 2010)は、体育運動部の運営に関する満足度について調査した。満足度尺度の因子分析の結果、“練習”“交流”“活動日”“構成員”“施設”“民主的運営”の6因子を抽出している。また阿保は、性別、学年、役職、運動部の性格による満足度の差異について検討している。阿保(2009, 2010)では共通して、女性は男性よりも“練習”“構成員”“民主的運営”について満足をしており、1年生は2年生以上よりも、“練習”“民主的運営”について、幹部はその他の学生よりも“練習”について満足していた。加えて、1年生は2年生より全体的な満足度が高く、幹部はその他の学生よりも全体的な満足度

が低いことが共通していた。

サークル集団に対する満足に関連して、サークル集団への改善について研究されていた（阿保, 2009, 2010；大川・元・田中・笠井・植村, 2009）。阿保（2009, 2010）の調査においては、“自分の意見が部の活動目標・内容に活かされている”“部内の懇親会のあり方”について、改善をして欲しいと学生は強く考えていた。また大川他（2009）において、サークル集団に所属する成員は“指導方法”“休暇期間の練習日数や回数”“練習の楽しさや楽しくする工夫”などについて強く改善をして欲しいと考えていた。

以上のように、2003年以前は、満足感と満足感に影響を与える要因との関連性が検討されていたが、2003年以降は、サークル集団への満足感を構成する要因について検討されている。満足感を構成する要因としては、“活動”に関する満足、“練習”に関する満足、“人間関係”に関する満足が共通していると考えられる。一方で、“運営”に関する満足が、新たに見出されている。1年生は2年生よりも、幹部以外の学生は幹部よりもサークル集団に対して満足していた。しかし“練習”や“運営”に対して不満を抱き、改善を求めている学生が多いことも明らかとなった。

サークル集団へのコミットメントに関する研究
新井・松井（2003）では、サークル集団への所属の規定要因の研究として、帰属意識の研究を挙げている（橋爪・佐藤・高木, 1994a, 1994b）。橋爪他（1994a, 1994b）は、帰属意識を“サークル集団を自分と同一視し、強い愛着を抱き、あるいは自己実現の場とみなすことで、われわれ意識を抱くようになること”と定義し、大学生を対象にサークル集団への帰属意識に関して検討した。その結果、サークル集団の目標・価値観・規範の受け入れを表す“規範的帰属意識”、サークル集団のために活動したいという積極的意欲を表す“意欲的帰属意識”、サークル集団にとどまりたいという願望を表す“残留的帰属意識”、サークル集団に所属すると何か得るものがあるという功利的意識を表す“功利的帰属意識”の4因子を抽出した。

他方、組織心理学では、組織コミットメントは組織帰属意識と同義の概念として扱われている。コミットメントとは、“対象”に対する献身や傾倒・没頭”を意味し、産業・組織心理学領域では、組織に対するコミットメントは組織コミットメント（organizational commitment）と呼ばれる。Allen & Meyer（1990）は、組織コミットメントが情緒的（affective）コミットメント、継続的（continuance）

コミットメント、規範的（normative）コミットメントから構成される組織コミットメントの3要素モデルを提唱している。組織コミットメント研究をレビューした Bergman（2006）は、情緒的コミットメントを“組織への同一視と関与によって特徴付けられる個人が感じる組織との情緒的繋がり”と定義した。また継続的コミットメントを“組織に投じた利益とコストの関係によって規定される組織に居る必要があると考える程度”と、規範的コミットメントを“一部の個人において義務によって規定される組織との繋がり”とそれぞれ定義している。

2003年以降、組織コミットメントをサークル集団へと適用する試みがなされている（橋本他, 2010；高木, 2006, 2007）。橋本他（2010）は、組織コミットメントをサークル集団への適用を試みて、サークル・コミットメントについて検討している。その結果、情緒的な愛着を表す“情緒的コミットメント”、罪悪感や責任からサークルをやめたくても、困難であるという状況の認知を表す“規範的コミットメント”、集団への同一視を表す“集団同一視コミットメント”の3因子を抽出した。

高木（2006）は、企業組織に対する組織コミットメント尺度（高木・石田・益田, 1997）を使用して、大学生にとって重要な組織への帰属意識と充実感の関連を検討した。同調査では、帰属意識を抱く組織を大学生にとって重要な組織を選択するように求め、学生の26%が“大学”を、28%が“バイト先”を、18%が“部活動”を、17%が“サークル”を重要な組織としてそれぞれ選択していた。大学生における組織コミットメント尺度の因子分析の結果、高木他（1997）と同様に“内在化要素”“愛着要素”“規範的要素”の3因子が抽出されたが、大学生の組織コミットメントにおいて、“存続的要素”は抽出されなかった。学生は重要な組織の価値を内在化するほど、大学生生活の充実感が促進され、重要な組織に愛着を抱くほど孤立感が抑制されていた。

高木（2007）は、大学生にとっての重要な組織（大学、バイト先、部活動、サークル）ごとに、重要な組織への帰属意識が大学生生活に与える影響を検討した。高木（2007）は、高木（2006）による組織帰属意識尺度に項目を新たに加えて、“内在化要素”“愛着要素”“規範的要素”“存続的要素”の4因子を抽出した。重要な組織による帰属意識の相違として、“内在化要素”は、バイト先や大学よりもサークルや部活動において高く、“愛着要素”は、大学よりもサークルにおいて高かった。また“存続的要素”は、バイト先や大学よりもサークルにおいて低く、“規範的要素”は、大学で最も高く、サークルよりも部

活動の方が高かった。

このように2003年以降に実施されたサークル集団へのコミットメントにおける研究では、共通した要素を抽出している一方で、異なる要素も見出されている。サークル集団へのコミットメントに関する要素の相互関係を把握するために、先行研究より得られている要素をTable 1にまとめた。

まず“情緒的コミットメント”と“愛着要素”は、集団に対する“愛着”を表す態度であると考えられる。“規範的コミットメント”と“規範的要素”は、集団を辞めたいが辞めづらいついて考えており、集団に対する“葛藤”を表す態度であると考えられる。“残留的帰属意識”は、集団に留まりたいという願望を表している。組織コミットメントにおける概念をまとめた高尾(1996)は、橋爪他(1994a)が使用した関本・花田(1987)による帰属意識における下位尺度である“残留意欲”を、辞めたいが辞められないというコスト認知を表すコミットメントとしてまとめている。“残留的帰属意識”は“葛藤”的態度を含むと考えられるため、“愛着”ならびに“葛藤”を包括した態度と解釈される。次に、“内在化要素”は集団の価値や目標を受け入れ、組織のために尽力しようとする態度であり“同一視”と“尽力”という2つの要素を含んでいる。“意欲的帰属意識”は、組織のために働きたいという積極的意欲であり、“内在化要素”における“尽力”を表す態度と共通している。“集団同一視コミットメント”と“規範的帰属意識”は、集団の目標や価値が自己と一致している程度を表しており、“内在化要素”における集団との“同一視”という要素を表している。“功利的帰属意識”と“存続的帰属意識”は、何か得られるものがあるから所属するという集団への“功利”を表す態度としてまとめられる。しかし、5つの要素をまとめて扱った研究は見つからなかった。

サークル集団研究のまとめ

これまで紹介した新井・松井(2003)以前に実施された研究と、以降に実施された研究とを比較して、

近年のサークル集団研究の動向をまとめ、今後の展開について考察する。

サークル集団研究の動向 サークル集団研究は2003年以降に、サークル集団への所属の重要性を指摘する研究から、サークル集団との関わりの重要性を指摘する研究へと変化していた。学生とサークル集団との関わりを扱った研究では、サークル集団に満足し、サークル集団に能動的に関わることで、学生が大学生活に充実感を抱くことが明らかとなった。しかし、学生とサークル集団との関わりに関する研究が少ないことが指摘されていた。

サークル集団の性質に関する研究は、年功序列規範を取り上げる研究から、集団フォーマル性や組織風土を中心として扱う研究へと推移していた。サークル集団が意見を表明しやすい風土であれば、学生はサークル集団に適応しやすく、集団に迷惑となる行為を行わないことが明らかとなった。一方で、サークル集団が組織として管理されていると、学生はサークル集団の規則や先輩に従い、大学生活にストレスを感じていた。

2003年以降のリーダーシップ研究では、リーダーだけではなく、キャプテンやサブリーダーというリーダー以外の役職に就く成員に焦点が当てられており、リーダーシップ研究の対象範囲が広がっていた。リーダーが集団を維持しようとする場合、学生は集団の活動に参加しようとしていた。サークル集団の男性メンバーが求めるキャプテンは、競技に関する知識や能力など活動志向のキャプテンであり、女性メンバーが求めるキャプテンは、人間関係を円滑にまとめるキャプテンであった。またサブリーダーによるリーダーへの補佐行動はリーダーのリーダーシップを高め、所属成員の仲間関係への満足や、活動への向上心を高めていた。

2003年以降では、新たにサークル集団内の対人行動研究が検討されていた。サークル集団内の対人行動の研究では、13の対後輩行動と、6つの対先輩行動を新たに見出された。対後輩行動は“支配—非支配”と“親和—拒否”による2軸により構成され、対先輩行動は“服従—不服従”と“親和—回避”

Table 1 サークル集団へのコミットメントの概念整理

	愛着	葛藤	尽力	同一視	功利
サークル・コミットメント (橋本他, 2010)	情緒的	規範的		集団同一視	
サークル集団帰属意識 (橋爪他, 1994a, 1994b)	残留的		意欲的	規範的	功利的
組織帰属意識 (高木, 2006, 2007)	愛着要素	規範的要素	内在化要素		存続的要素

による2軸で構成されており、対先輩行動と対後輩行動との間に対応関係が見られた。サークル集団のフォーマル性が強くなるほど、後輩は先輩に服従しやすい傾向が見られた。加えて、後輩は先輩に親密さを感じるほど先輩との親交を深めようとし、先輩の行動を正当であると判断するほど先輩に従いやすく、先輩から望ましくない行動を受けると先輩を回避していた。

サークル集団へのマイナスの影響を与える要因の検討を行った研究として、新たにサークル集団内の迷惑行為が検討されていた。サークル集団の性質が迷惑行為に及ぼす影響として、サークル集団が管理されているほど、活動を阻害する迷惑行為が抑制され、サークル集団が開放的であるほど、集団内の人間関係の迷惑行為が抑制されていた。また上下関係が明確で所属人数が多い集団と、上下関係が不明確で所属人数が少ない集団において、迷惑行為が強く認知されていた。一方で、所属成員の性質が迷惑行為に及ぼす影響として、所属成員の集団アイデンティティが高いほど、迷惑行為が強く認知されていた。

2003年以前や2003年以降のサークル集団研究では、学生とサークル集団との関わりに関連して、参加動機、達成動機、満足感、コミットメントというサークル集団への所属を規定する要因について一貫して検討されている。

サークル集団の参加動機について、参加動機の構造の検討が2003年以降も一貫して検討されていたが、2003年以降では、サークル活動と部活動での相違が新たに検討されていた。大学生はサークルに対して自由な雰囲気などを求め、部活に対して達成感などを求めている。

サークル集団における達成動機の研究は、達成動機とサークル集団の性質に関連した研究がされており、集団のフォーマル性が高いほど、所属成員は積極的に活動に参加していた。一方で、動機の対象を練習に限定した研究もされており、練習への動機が強い学生は、活動に積極的に関与し、他の所属成員との関係についても満足していた。

サークル集団への満足感の研究は、サークル集団への満足感に影響を与える要因の検討から、満足感の構造の検討やサークル集団の改善点の検討へと変化していた。学生はサークル集団の“練習”“活動”“人間関係”“運営”という4つの要素に満足感を抱き、1年生は2年生よりも、幹部以外の学生は幹部の学生よりもサークル集団に満足していた。

コミットメント研究は、サークル集団との関わりを把握するのに重要な研究領域であり、2003年以

前ではあまり見られなかったが、2003年以降では、サークル集団へのコミットメントに関する研究が増加していた。しかしサークル集団へのコミットメントに関して共通する要素が見られる一方で、異なる要素も見られた。そこでサークル集団におけるコミットメントについて概念を整理した結果、“愛着”“葛藤”“意欲”“同一視”“功利”という5つの要素にまとめられた。

サークル集団研究の展望 以上の研究動向を踏まえて、サークル集団研究の展望を述べる。

第一に、サークル集団研究を概括すると、リーダーシップ研究や対人行動研究のように学生と“所属成員”との関わり、達成動機のように学生と“集団活動”との関わり、集団フォーマル性や組織風土のように学生と“集団体制”との関わり、参加動機やコミットメントのように学生と“集団自体”との関わりという4つの関わりの領域に分類される。サークル集団研究では、それぞれの関わりの領域で検討が重ねられており、研究知見が深まっていた。一方で、“所属成員”“集団活動”“集団体制”“集団自体”という4つの要因を包括して相互関係を検討した研究は見当たらない。しかしこれらの要因は独立するものではなく、相互に作用して学生に影響を与えていると考えられる。学生はサークル集団内の成員と親密であるが、活動に対して不満を抱いていると、サークル集団との関わりは功利的となるかもしれない。また厳格な体制のサークル集団においては、活動に積極的に関わる学生ほど集団との関わりに葛藤を抱く可能性がある。今後のサークル集団研究では、サークル集団の所属成員が“所属成員”“集団活動”“集団体制”“集団自体”の相互関係を検討することで、サークル集団研究の全体像を把握することが期待される。

第二に、2003年以降のサークル集団研究において、学生とサークル集団との関わり合いが大学生活への充実感を変化させていることが明らかとなった。こうした関わり方やサークル集団へのコミットメントは、サークル集団に抱く態度の一部であると捉えることが出来る。したがって、これらの現象を包括的に捉えるためには、学生がサークル集団に対して抱く態度を検討することは重要であると考えられる。しかしサークル集団に関する研究においては、集団への態度に関する研究が少ないことが指摘されている（橋本他、2010）。組織コミットメントをサークル集団に適用した研究においては、サークル集団への態度に関する概念が統一されていなかった。また組織毎に組織への態度を測定する独自の尺度を作成する必要性も指摘されている（野寺・中村、

2011)。今後は、サークル集団独自の態度についてのより詳細な検討が望まれる。

引用文献

- 阿保雅行 (2009). 本学体育会運動部の運営に関する満足度調査—2008年を中心に— 東京外国語大学論集, **78**, 289-302.
- 阿保雅行 (2010). 本学体育会運動部の運営に関する満足度調査—2009年を中心に— 東京外国語大学論集, **81**, 403-416.
- Allen, N.J., & Meyer, J.P. (1990). The measurement and antecedents of affective, continuance and normative commitment to the organization, *Journal of Occupational Psychology*, **63**, 1-18.
- 新井洋輔 (2004). サークル集団における対先輩行動: 集団フォーマル性の概念を中心に 社会心理学研究, **20**, 35-47.
- 新井洋輔・松井 豊 (2003). 大学生の部活動・サークル集団に関する研究動向 筑波大学心理学紀要, **26**, 95-105.
- 新井洋輔・松井 豊 (2004). サークル集団における対後輩行動の構造 筑波大学心理学紀要, **27**, 29-41.
- 新井洋輔・松井 豊 (2006). 対先輩行動の構造の検討: 対象となる先輩を特定して 筑波大学心理学紀要, **32**, 11-19.
- Bergman, M.E. (2006). The relationship between affective and normative commitment: Review and research agenda, *Journal of Organizational Behavior*, **27**, 645-663.
- 遠藤俊郎・下川光一・安田 貢・布施 洋・袴田敦士・伊藤潤二 (2009). チームスポーツにおける集団規範—特にバレーボールについて— 教育実験研究, **14**, 84-94.
- 不動俊樹 (2004). 愛媛大学のサークル活動の現状と課題 大学教育実践ジャーナル, **2**, 35-37.
- 福崎俊貴・岩淵千明 (2008). 集団フォーマル性の相違と性別が達成動機と対人関係処理能力に及ぼす影響に関する研究 日本心理学会第72回大会発表論文集, 157.
- 蜂谷良彦 (1999). 集団の賢さと思かさ—小集団リーダーシップの研究— ミネルヴァ書房
- 橋爪裕子・佐藤 裕・高木 修 (1994a). サークル集団帰属意識の研究 (1) —サークルに対して抱く魅力と帰属意識— 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 370-371.
- 橋爪裕子・佐藤 裕・高木 修 (1994b). サークル集団帰属意識の研究 (2) —サークルに対する個人的要求の推移と帰属意識の形成について— 日本グループ・ダイナミクス学会第42回大会発表論文集, 208-209.
- 橋本剛明・唐沢かおり・磯崎三喜年 (2010). 大学生サークル集団におけるコミットメント・モデル—準組織集団の観点からの検討— 実験社会心理学研究, **50**, 76-88.
- 飛田 操 (1994). 大学生のサークル集団における自己の貢献度評価と満足度の関連について 福島大学教育学部論集 (教育・心理部門), **55**, 55-64.
- 樋口康彦 (1996). スポーツ集団における組織要因とメンバーの達成動機との関連について 実験社会心理学研究, **36**, 42-55.
- 樋口康彦 (2007). 大学生の適応に影響を与える要因に関する考察 国際教養学部紀要, **3**, 97-102.
- 平野貴也・柳 敏晴 (2007). 学生ウィンドサーファーの参加動機および活動継続要因が競技成績に及ぼす影響 名桜大学総合研究, **10**, 13-22.
- 池田瑠里・畑 攻 (2003). 女子体育大生の運動部活動における「やめたい症候群」日本体育学会第54回大会号, 427.
- 入江 愛・高橋知音 (2008). 大学サークルへの満足度における Herzberg の二要因理論を基にした因果モデルの妥当性の検討—大学生の精神的健康を高めるために— 信州心理臨床紀要, **7**, 9-19.
- 小室啓子・荒井弘和・竹中晃二 (2008). 大学生アスリートのメンタルヘルスとスポーツ集団の組織風土 体育の科学, **58**, 127-132.
- 高口 央・坂田桐子・藤本光平 (2007). リーダーシップとプロトタイプ性が集団成員のモラルとリーダー知覚に及ぼす効果 社会心理学研究, **22**, 245-257.
- 蔵本健太・菊池秀夫 (2006). 大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究—体育運動部とスポーツサークル活動参加者の比較— 中京大学体育学論叢, **47**, 37-48.
- 村井 剛・猪俣仁宏 (2010). 勝利志向型スポーツチームにおける理想のキャプテン像について 実験社会心理学研究, **50**, 28-36.
- 野寺 綾・中村信次 (2011). 向大学態度尺度開発の試み 日本福祉大学子ども発達学論集, **3**, 71-80.
- 大淵憲一 (1996). 手続き的公正を越えて: 社会集団の理論へ 田中堅一郎 (編) 社会的公正の心

- 理学，心理学の視点からみた「フェア」と「アンフェア」 ナカニシヤ出版 pp.83-pp.103.
- 大川康隆・元 柄善・田中靖久・笠井妙美・植村隆志 (2009). 東海大学九州キャンパスのサークル・部活動における CS 調査—2009 年の調査から— 東海大学総合経営学部紀要, **2**, 39-50.
- 尾関美喜・吉田俊和 (2005). 集団での上下関係規範と集団サイズが迷惑の認知に及ぼす影響 応用心理学研究, **31**, 1-11.
- 尾関美喜・吉田俊和 (2007). 集団内における迷惑行為の生起及び認知—組織風土・集団アイデンティティによる検討— 実験社会心理学研究, **47**, 26-38.
- 尾関美喜・吉田俊和 (2009). 集団アイデンティティが集団内における迷惑の認知に及ぼす効果—成員性と誇りの機能的差異に着目して— 実験社会心理学研究, **49**, 32-44.
- 尾関美喜・飯田典子・鈴木香織・中野ちあき (2009). 大学生の部活動・サークル集団における組織風土と過剰適応傾向との関連 日本教育心理学会第 51 会総会発表論文集, 43.
- 酒井 朗・安藤めぐみ (1998). 課外活動にみる現代大学生の人間関係 お茶の水女子大学人間発達研究, **21**, 1-15.
- 島本好平・石井源信 (2008). 運動部活動におけるスポーツ経験がライフスキルに与える影響—活動へのコミットメントの差異の検討— 日本教育心理学会第 50 回総会発表論文集, 722.
- 鈴木繕将 (2009). 部活動集団におけるサブリーダーの補佐行動についての検討—補佐行動尺度の作成およびリーダーシップ行動との関連— 北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集, **12**, 141-156.
- 高木浩人 (2006). 大学生の組織帰属意識と充実感の関係 愛知学院大学心身科学部紀要, **2**, 61-67.
- 高木浩人 (2007). 大学生の組織帰属意識と充実感の関係 (2) —組織による差異の検討— 愛知学院大学心身科学部紀要, **3**, 47-54.
- 高木浩人・石田正浩・益田 圭 (1997). 第 7 章 会社人間をめぐる要因の検討 田尾雅夫 (編) 「会社人間」の研究—組織コミットメントの理論と実際 京都大学学術出版会 pp.265-pp.296.
- 田中希穂・井内伸栄・久保田豊司・上田博之 (2007). 練習に対する動機づけが、選手の心理的要求の充足、目標志向、練習態度に及ぼす影響 大阪信愛女学院短期大学紀要, **41**, 7-16.
- 田尾雅夫 (1997) 「会社人間」の研究：組織コミットメントの理論と実際 京都大学学術出版会.
- 山本教人 (1990). 大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較 体育学研究, **35**, 109-119.
- 安田 貢・遠藤俊郎・下川浩一・布施 洋・袴田敦士・伊藤潤二 (2009). 大学生の運動部活動に関する回顧調査 山梨大学教育人間科学部紀要, **10**, 118-128.
- 結城雅樹・山口 勤 (1995). 集団内の長期的衡平：理論的精緻化とその証拠 日本グループ・ダイナミックス学会第 43 会大会発表論文集, 136-137.
- 結城雅樹・山口 勤 (1996). 年功序列規範の公正性判断の媒介過程：集団内の長期的衡平モデルからの予測の検証 日本社会心理学会第 37 会大会発表論文集, 296-297.
- 渡辺 亮 (2007). 大学生の集団活動経歴と社会的スキル及び向社会的行動との関連について—小学校・中学校・高校時代の部・スポーツクラブ活動経験をもとに— 臨床教育学研究, **33**, 50.
- 渡邊義行・高橋雄一 (2002). 岐阜大学教育学部学生のサークル所属に関する調査研究 岐阜大学教育学部報告 (自然科学), **26**, 23-31.

(受稿 9 月 30 日：受理 10 月 11 日)